

【第1回】医療のまちづくり市民会議議事録

開催日時：令和5年1月20日（金）18時00分～19時30分

会 場：南魚沼市役所 大会議室

参 加 者：市民代表（9人）、林市長、病院部局（外山病院事業管理者、井口経営管理部長、事務局4人）計16人

傍 聴 者：南魚沼市議会議員（7人）、報道関係者（1人）、医療関係者（1人）、市職員（3人）

次第

- 1 開会
- 2 市長挨拶
- 3 議題
(1) 南魚沼市が目指すべき「医療のまちづくり」について
- 4 その他
- 5 閉会

配布資料

- 資料1 「医療のまちづくりに関する骨太の全体計画（案）」の概要
資料2 「市民にお願いしたいこと」アンケート結果
資料3 総合確保方針の見直しについて（素案）厚生労働省

会議の内容・各委員からのご意見

- 1 開会（井口経営管理部長（以下、「事務局長」という。））
- 2 市長挨拶
・本日はお越しいただいた多様な市民の皆様から、南魚沼市が目指す医療のまちづくりについて、広くご意見をいただきたい。また、今後も議論を深めていきたいと考えている。
- 3 議題
■事務局長
・これ以降の進行については座長にお任せしたい。
■市長
・座長について、外山病院事業管理者にお願いしたいと思うがよろしいか。
（「異議なし」の声）

■外山病院事業管理者（以下、「座長」という。）

- ・ 3 議題（1）南魚沼市が目指すべき「医療のまちづくり」について、事務局からの説明を求める。

【説明】（医療対策課長）

資料 1 「医療のまちづくりに関する骨太の全体計画（案）」の概要

資料 2 「市民にお願いしたいこと」アンケート結果（市立病院職員からの声）

- ・ 資料 2 については、病院スタッフを対象に「市民にお願いしたいこと」をアンケート調査した結果。ボランティアをお願いしたい内容や通常の診療の中でお願いしたい項目。

■座長

- ・ 補足説明をさせていただく。
- ・ 南魚沼市が将来的にどのような医療のまちづくりを目指すべきかが本日の議題。今後も市民の皆さんと議論を進めなくてはいけないと考えている。
- ・ 医療について、受ける側と提供する側の意見が同じベクトルに向かうよう近づけていくことで、市立病院に対する市民の愛着を高め、お互いが支え合う形が理想と考えている。
- ・ 以上を実現するために、本日の会を自由な意見を出す場にしたいと考えている。

■A氏

- ・ アンケート結果にあった花などの周辺環境のボランティアについて。自分が所属している農協青年部には花卉生産農家もいる。苗の提供などで協力できると思われる。

■B氏

- ・ 花を植えるなどのボランティア活動に市内の中高生から協力してもらうことも良いと思う。今はそのきっかけがない状態。きっかけを作りたい。

■座長

- ・ 事務局より事前をお願いしていた意見発表について、委員の皆様に発表をお願いしたい。

■C氏

- ・ 黒岩卓夫医師が掲げている理念「予防なき医療はあり得ない」は、南魚沼市の医療のまちづくりにおいて最も必要なことの一つ。
- ・ 医師、看護師、介護士不足と言われる中、まず「病気になる」「介護を要しない」ようになることが大切。増加の一途をたどる医療費の削減にもつながる。
- ・ 病気予防として市が実施している健診事業は最も効果的なものの一つだが、利便性に課題がある。1 日で健診が済む健友館に行くには、六日町や塩沢地域の方には地理的に不利。また、六日町、塩沢地域の方の健診会場である市民会館には、市民バスが直接停車する路線がほとんどない。移動手段を持たない方は非常に不便である。
- ・ 次に、健診があるたびに市民病院から健友館への移動を強いられている医療スタッフの負担。医師、看護師不足の現状を考えると改善の必要性を強く感じる。
- ・ 上記二点を解消するため、現在計画されている健友館の移転は非常に有意義であり、ぜひ実施していただきたい。

- ・ただし、箱物を作ると同時にソフト面の充実、交通体系の改善に多くの検討が必要。健診施設に限らず、市民病院や基幹病院も含め、せっかく良い施設ができて「行きづらい」ことが無いようにしてほしい。
- ・障がい者や高齢者にとって、雪国、へき地での路線バスは使い勝手が悪い。市民バスの路線見直しなども必要と思うが、個人的には乗り合いタクシーなどオンデマンド交通の導入を希望する。
- ・医療のまちづくりにおいては、以上の他にも病院改革や地域コミュニティの活性化など、様々な課題があるため、医療関係者のみならず、市民も一緒に考えなければならない。
- ・今回の会議に関わらせていただき、健康は多くの方々によって支えられていることを改めて感じた。

■A氏

- ・病院ごとに利用する患者の対象年齢区分化を提案する。混雑緩和とより専門的な対応が可能となる。
- ・若者の健康診断が重要だと考える。若い人が健康に気を使い、若い世代が健康診断を受けようというアイデアが必要。高校卒業後、何年経過でドック受診に帰ってくるなど。
- ・免許返納後の高齢者にとって、この地域は交通の便が悪い。

■B氏

- ・新しい健友館を新たなライフスタイルの発信交流拠点とする提案。
- ・地元の食材を使った健康レストラン、オーガニックカフェ、温泉や岩盤浴、ドックや健康合宿ができる宿泊施設の併設など、「自然を処方する」新しい医療の具現化。多世代ライフスタイルの発信交流拠点としての健診施設の在り方を提案するもの。
- ・「医療×自然」「医療×農業」「医療×IT」など、地域資源を活用したヘルスケアプログラムを実施し、ツーリズムと関連させ、市内外、国内外から様々な方の訪問を見込む。また、新たな視点と付加価値の掛け算により、稼ぐ健診施設として経営安定を目指すことも必要。
- ・このような新たな取り組みを学校教育や社会教育に活かすことで、特に医師など、子どもの教育情報に関心の高い方々に対して移住の選択肢になる可能性もあると考える。
- ・病院事業のミッション「地域住民の生きるを支え続ける」に加え、この拠点が「生きるを地域内外の人々で支え合える」施設となるような在り方に。

■座長

- ・議論を深めるためにちょうど良い資料があるので、事務局に資料3についての説明を求める。

【説明】（医療対策課長）

資料3 総合確保方針の見直しについて（素案）厚生労働省

- ・この資料は令和4年12月16日に行われた第18回医療介護総合確保促進会議の資料。
- ・資料7ページには、地域共生社会づくりについて以下の3点が記載されている。
- ・一番目。問題を抱える人々に対しては、地域の包括的な支援である「社会的処方」を活用して「地域共生社会」づくりに取り組むこと。

- ・二番目。医療、介護提供体制は「まちづくり」とリンクさせることが重要であること。
- ・三番目。医療、介護提供体制は、地域住民との連携が重要であること。

■座長

- ・今ほど説明のあった総合確保方針の変更は、これまで南魚沼市が進めてきた医療のまちづくりと方向性が非常に似ている。
- ・令和8年オープンを目指す新健友館では、これまでの健診により未病を目指す方式から、さらに進んだ形として、古典的な医療資源だけに頼らない、「社会的処方」を活用するためのボランティアの交流拠点などの機能が必要。南魚沼市における人生100年時代の創造に向けたパラダイムシフトが必要。
- ・その拠点で、筋力作り教室や料理教室に市立病院の専門職がアドバイスするなど、南魚沼市の財産ともいえる地域づくり協議会との連携により、まちづくりに繋げていくことが重要。

■D氏

- ・私は首都圏から移住してきた。若い頃は医療に関しては全く無関心だった。
- ・移住当初は友達も少なく、病院がどこにあるかも分からない状態。市報は重要な情報源。
- ・この地域は田舎ではあるが、スーパーや銀行、コンビニもあり、日常生活に不便は感じない。ただし、子どもが少ない、車がないと生活できないと感じる。道路が広く、ペーパードライバーの自分にとってはありがたかったが。

■E氏

- ・病院の待ち時間が見えない。予約がなかなか取れない。オンラインで待ち時間や予約の状況を把握できるようにしてほしい。
- ・民間を含め、子どもを診てもらいたいときに連れて行けるところが少ない。
- ・人生100年時代においては予防が重要と考える。
- ・知り合いが群馬の温泉を利用したりハビリ施設に行った。非常に評判が良いようだ。

■F氏

- ・少子化が進んでいる中、里帰り出産のサポートは十分か。
- ・転勤家庭も多い。親だけで安心して子育てできる環境か。SNSやオンラインを活用した子育て支援の拡充と依頼のしやすさ、体制整備が必要。
- ・新健診施設にカフェや体験スペースなどがあれば総合支援学校のカフェや卒業後の就職先としても活用可能。
- ・体験スペースでは高齢者の協力により宅配弁当や料理教室、健康教室、スポーツジムなど一生涯利用できる施設となることを期待する。
- ・発達障害や精神的に追い込まれやすい産後のサポート、その潤滑ができているのか。
- ・冬季や天候不良の際でも安心して子どもを預けられる、遊ばせる施設の充実。パパでも利用しやすい環境づくり。
- ・一概に高齢者といっても若々しい方もいる。支えられる対象ではなく、支える側への転換の発想も必要。

- ・子どもの教育面での不安が大きい、この地域において医師の定住は非常に難しい。ただし、関東方面に近いことは利点。研究が出来る環境、人との繋がりを感じる環境、安心して子育てが出来る環境は医師にとってメリット。
- ・医師のキャリアにおいて、この地域で得られるメリットを体感してもらう。定住には家庭の理解が必要。子育て環境は良いアピールになるが、現状ではメリットを感じられない。
- ・新健診施設について、ある程度のキャパシティは必要。ふるさと納税の活用など市民にも分かりやすい方法を検討してほしい。

■ G氏

- ・令和4年8月に南魚沼市での生活を始めたばかり。何度も訪れたことはあったが、実際に生活することで都会にはない四季の移ろいを感じている。これが南魚沼市の最大の魅力。
- ・この地域は首都圏からのアクセスも良く、容易に訪れることができる。わずか2時間程度で都会の喧騒から離れ、非日常を感じられる環境がある。
- ・この利点を活かした医療観光への取り組みを提案する。
- ・医療観光は一般的にはインバウンドがターゲットであるが、まずは首都圏をターゲットにすることを推奨。
- ・首都圏の富裕層には医療や健診に付加価値を求める層も多くいる。
- ・その方々を対象に、地元の宿泊施設や飲食店、当地ならではのアクティビティと連携させ、付加価値を生み出せば需要があると考えます。

■ H氏

- ・「医師は飲食店が少ないから定住しない。市内の住環境に不足がある。」との話を人から聞いた。元々住んでいる自分たちには十分と思うが、飲食店を増やすなど、医師の定住を考えた住環境整備について一考いただきたい。
- ・自身は大和病院に3か月に1回行っている。医師に自家野菜を届けたり、医師から八坂神社の祭礼にお越しいただいたり、交流を行っている。

■ I氏

- ・高齢者に必要な医療とは、安心して年齢を重ねられる市を目指して、という視点からお話する。高齢者の多くは複数の疾患があるため、治療とコントロールを行いながら療養支援を行うことが重要。
- ・疾病別の医療のほか、生活全般を支える医療が必要。認知症など療養の長期化に際しては、現状の把握から栄養、服薬の指導、看取りなどの支援の提供が求められる。
- ・充実した生活が送れるように多職種チームでのカンファレンスなど連携体制の強化を期待。
- ・高齢人口の増加によって訪問診療の重要性が高まるため、地域のつながりや社会資源の活用も重要となってくる。
- ・要介護度5になっても一人暮らしができる環境整備、体制整備により、その人らしく暮らせる支援が可能かを考えるとイメージしやすい。
- ・生活の質の向上の見える化、社会参加の機会が図られること等により、高齢でも長期に望む

暮らしが送れると思われる。

■ J 氏

(当日欠席のため事前にご意見いただいた以下の内容について、事務局代読)

- ・精神障がいを持つ方、通所支援施設を利用する方でも自分で自動車を運転する方は 10%に満たない状態。
- ・買い物や通勤など日常の移動手段は公共交通機関に頼らざるを得ない。さらに、家族の高齢化や核家族化の進行により家族で支える力が減退している。
- ・障がい者以外でも、高齢者の移動は運転免許の返納の推進が求められる中、今後ますます厳しい状況が予想される。将来に向けた交通手段の確保・充実をお願いしたい。

■座長

- ・医療のまちづくりを具体化していく中で、新健友館には改めて様々な活動の拠点となる必要があることを強く認識されたと思う。
- ・以上を踏まえ、最後に林市長より講評をいただきたい。

■市長

- ・本日の会議により新健診施設建設計画の方向性に確信を得た。
- ・医療資源の確保のための教育環境の重要性、雪国、高齢化の中での医療のまちづくりにおける公共交通の重要性を認識した。
- ・観光を取り入れた医療の実現に向け、温泉の活用を検討したい。

4 その他

■事務局長

- ・今後も市民の声に支えられた病院事業の運営を目指すため、3 か月に 1 回程度のペースで、医療のまちづくり市民会議を継続したいと考えている。
- ・魚沼地域は医療スタッフの人数が全国的に見て最低レベル。令和 6 年度から実施される医師の働き方改革では医師の時間外労働が年間 960 時間まで規制される。現状では、医師が規制の倍近い残業をして地域の医療を支えている。看護師等も人員確保が難しく、勤務環境が厳しく疲弊していることも事実。次回以降、このような課題についてもデータを示しながら、市民の皆様のご意見をお聞きし、議論を進めていきたい。

5 閉会

■座長

- ・以上で本日の議事は全て終了とする。本日の議論を踏まえ、令和 4 年 6 月に策定した骨太の全体計画の見直しに反映するとともに、今後の会議議題として活用させていただく。

(19 時 30 分終了)